

20110512 土業企画_議事録

テーマ 「幸せな牛からおいしい牛乳 ～山地酪農が中山間地域を救う～」

発表者 中洞正氏（株式会社山地酪農研究所 代表取締役）

日時 2011年5月12日 19時00分～20時50分

場所 東京・竹橋 ちよだプラットフォームスクウェア

参加者 22人（シンクタンク研究員、大学研究員、会社経営者、会社員、出版社、
NPO 法人理事長、税理士、司法書士、行政書士など）

主催者あいさつ、趣旨説明

参加者の一言

- ・酪農就農準備中です
- ・大学時代、角田市にて酪農体験をしました
- ・「黒い牛乳」に感銘。日本の畜産の本来の姿を見る。日本全国の山地酪農の牧場を回っています。ただし、中洞さんには会えなかった。今日お会いできて光栄です
- ・お金の地産地消をしたい。地方で集めたお金は地方で使うようにしたい

発表 「幸せな牛からおいしい牛乳 ～山地酪農が中山間地域を救う～」

※リンク、岡田元治社長からのご紹介

広告制作会社を経営していましたが、1998年、IT系に移行しました

その後、中洞さんと出会いました。素晴らしい手法を頑固に続けてきた中洞さんを企業として応援しています

都市生活者に安全でおいしい牛乳を届けたいという思いを一つにしています

大震災を乗り越えて、この夏からの牛乳の販売を予定しています

※中洞さんからの発表

サマリー

「山地（やまち）酪農とは、周年昼夜放牧により畜産のことです。牛たちは、牛舎に閉じ込められストレスを受けたりすることなく、山地で草を食べて、安全で美味しい牛乳を提供してくれます。

中洞正さんは、この山地酪農に東京農大在学中に出会い、卒業後、実践してきた方です。しかしながら現在に至るまで、畜産業界や、JA、地域などからの理解を得られず、様々な、そして、たいへんな苦勞をされてきました。それでも、山地酪農を続けてきたのは、「正し

いことを正しく言えば、消費者に伝わる。消費者は馬鹿ではない」と消費者と直接に手をつなげてきたからです。

中洞さんは、日本の森林（山間地）について、100年先を見越して、山全体をどうやって活かしていくか、農業、林業という枠にとられない発想が必要とします。そして、そのためには、人を育てることが大切であり、後継者をしっかり育てていくことが必要とします。」

I イン트로

1. 岩手県宮古市での大震災のお話しから

- ・津波警報の放送は流れていたのに、インターネットで防災情報を確認してから、避難する人が多くいた。このような方々で、津波に巻き込まれた方が多くいた
- ・津波警報はオオカミ少年的なところがあった。いままで何度も警報が出ていたが、津波が来ることはなかった
- ・他人からの情報に頼ることは危険かもしれない
- ・この経験をちゃんとした口伝で次の世代に伝えていきたい

2. 中洞さんのプロフィール

- ・宮古市に生まれ、育った。子どものころから、牛を飼いたかった
- ・東京農大に進む
- ・大学にて、酪農家に必要な情報は果たしてあるのか疑問。むしろ、学者を作ることに主眼があるのではないかと考えた
- ・大学の勉強に不満を持つ
- ・そのようなときに、山地酪農研究会と出会う。四国の、**岡崎正英氏**。山地酪農の第一人者。この先駆者の映像を見ることができた
- ・それまで、畜酪農とは、ブラジルなどの平原で牛を飼うものと考えていた
たとえば、大学の実習にて、東京近郊で食品残渣を与える酪農を見てきた
- ・岡崎氏の牧場はスイスのアルプス地方と同一のことを日本でも行っていることに、ショックを受けた。急峻な山地で牛の放牧をしていた
- ・学生のころ、芝の一節（ひとふし）、全山を覆うとの思いを持つ
- ・しかし、実際に酪農を始めると、山地酪農がいかに異端な手法であるかわかる
- ・消費者と直接に手を結ばないと成り立たないということがわかる
- ・すべての牛乳は農協系統が取り扱っている。この系統からはずれると、政府系の融資も

受けられないし、貸しはがしにも合う

- ・普通の金融機関であれば、お金の貸し借りで成り立つ。農協は、金融、生産資材、補助金のすべての窓口となっている
- ・農協に牛乳を卸さない者は、アウトサイダーとなる

II 発表

1. 酪農業界の概要

- ・牛乳の流通について
 - ・市販の牛乳のパッケージを見てみると、太陽や、牛の放牧シーンが描かれている
 - ・しかし現実には、牛は2. 2平方メートルの牛舎のスペースに押し込まれている（現在は、牛のサイズが大きくなっているのので、もう少し広いスペースに押し込まれている）
 - ・牛が太陽を見るのは、廃用牛になって死ぬときだけ
 - ・一生、牛舎の狭いスペースにつながれている。それが、酪農の現実
 - ・さる大手牛乳メーカーに電話をかけたことがある。コールセンターも、牛の一生はほとんど牛舎の中ですと答えていた
 - ・このことは、豚も鶏も同じ
-
- ・牛乳のパッケージに3. 8%牛乳と書かれていますが、これがどういう意味かご存知ですか？ これは、乳脂肪分のことです
 - ・3. 5%以下だと、牛乳は半値にされてしまう。しかし、牛乳のもともとの乳脂肪分は3. 2~3. 4%
 - ・現在、乳脂肪分4%のものも販売されている

2. 牛舎飼い

- ・人間にとっても問題。たとえば、糞尿公害（産業廃棄物の第2位）
- ・酪農家の中には、土地がないから、牛舎で飼うの、それが常識と言う者もいる。これは、ウソ。日本には広大な山地が放置され、そこには牛の餌となる植物が無尽蔵にある

3. 家畜福祉

- ・家畜が幸せでなければ、安全で美味しいものは作れない
- ・やっと、家畜福祉の政策が行われようとしている

4. 牛舎飼いが牛の健康をむしばむ

- ・山地酪農では、牛のツメを切ったことがない
- ・牛舎で飼うと、ツメが曲がる、これが、膝など関節に影響する。障害を持つ

5. 放牧牛は常に自由

- ・周年昼夜放牧、朝になると牛舎に戻ってくる。搾乳をし、牛におやつを上げる

6. 畜産の一般と、穀物の大量輸入

- ・農業は、穀物生産が主流。穀物が取れなくて草しか取れないところで畜産という産業がある
- ・穀物がたくさん取れるところで、畜産は不要
- ・アメリカに戦争で負けて、戦後、アメリカの穀物で食料危機をしのいだ。給食にはパンが基本になる。そして、無理やり牛乳を飲むことになった
- ・アメリカの余剰穀物を日本で消費することになった。このため、日本は先進国であるにも関わらず、食料自給率（カロリーベース）が低い状況になった
- ・先進国は、農業を大切にして、食料自給率を守っている。一朝ことがあったときのために、穀物を余剰させている

7. 山地酪農とは、牛の強さを活かす酪農

8. 驚異の消化吸収メカニズム

- ・4つの胃、反芻胃
- ・どんなに科学が進んでも、人間は草をそのまま食べられない。牛のおかげで、肉を食べ、乳を飲む
- ・穀物を食べさせるための畜産は邪道
- ・霜降りは、穀物を食べさせて、メタボ状態となった牛の肉ということ。健康的な食生活の肉といえるか
- ・白い牛乳は、穀物を食べさせているから。草を食べさせると、黄色味を帯びてくる

9. 国土の67%が森林

- ・日本は国土が狭い？
- ・森林のほとんどが放棄されている
- ・戦後、森に針葉樹を植えた。
- ・林業は、100年単位で経営を考えないといけない。循環を作っていないといけない
- ・戦後、外材が入る。このため、日本の林業の採算が取れなくなり、森林を放棄することに
- ・間伐すらないできていない。このため、地面に光が差さない。保水力がなくなり、土石流の原因となっている

- ・放棄されている森林に牛を放せば良い
- ・牛は木の葉を食べる。伐採した葉っぱを食べる
- ・カラマツ林。植林しただけで、牛が調整してくれる

- ・森林管理の手間を省くことができる
- ・下草刈りは人間が毎年しなければならない。これは、たいへんな作業
- ・牛がこれを代わりに行ってくれる

10. 100年先を見越して

- ・地球温暖化の影響で標高700m以上の我が牧場でも杉の育林が可能ではないかと思い今年になって始めて杉の植林をした。
- ・100年先を見越して、100年森林を守るためにはどうするか。
- ・そのためには、人を育てることが大切。後継者をしっかり育てる
- ・すぐ儲ける、明日儲けるという発想ではダメ

11. まとめ

- ・山全体をどうやって活かしていくか。農業、林業という枠にとらわれない発想が必要
- ・山から産出空される空気や、水は、とても大切なもの。お金があれば、なんでも揃うなどというのは、大いなる錯覚である。

質疑応答

Q1 中洞さんは、どうやって付加価値のある牛乳を提供していますか？

A1 現在（2011年5月12日時点）は、牛乳の販売をしていません。

リンクと連携することにより、来月、牛乳プラントが完成予定です。そして、7月に出荷の予定です

以前販売していたときのお話しですが、メタボ牛乳との差別化は楽でした

正しいことを正しく言えば、消費者に伝わります。消費者は馬鹿ではないのです

Q2 殺菌しない牛乳の生産は行っていないのでしょうか？

A2 現在の牛乳の値段では、殺菌しない牛乳での経営は成り立たないです

衛生観念が第一と考えていますので、無殺菌は難しいです

ある程度の経済力のある人たちへ適正な価格で販売したいと考えています。

Q3 中洞牧場ですが、他の畜産者に比べれば労力は少ないようです。どのような作業で、苦勞されていますか？

A3 現在、従業員6名がおりますが、収入がまったくない状態です。このため、リンクからの資金援助をいただいています

仕事としては、人材を育てることです。酪農家の子が後継者となるだけでなく、いろんな人が畜産業界に入ってこられるようにしたいです

でないと、日本の林業を再生できません。ボランティアだけでは人手が足りません
マネージャー的な人材が必要と考えています。このため、土木、炭焼き、重機、なんでもやらせています

牛乳プラントも自分たちでできるようにしています

また、このような人材を他の農家に派遣できるようにしたいと考えています

(中洞さん自身のいままでの苦勞の一端)

当初、なぜ、山地酪農の牛乳が広がらないのか不思議でならなかった

結局、その原因は、販売まで考えていなかったということだった

牛から乳を搾れば、売れると考えていただけだった

つまり、販売の努力をしていなかった

中洞式の山地酪農は、牛乳を消費者に届けるまで行うことに気付いた

消費者の支持がない産業は、滅亡していく。牧場そのものが消費者から支持してもらえないようにしていかなくてはならない

以上